

句集

祭獅子

西岡
よう子

序

能勢グループの西岡よう子さんも又句集を編まれることになった。

彼女に初めて出会ったのは、七年ほど前に能勢の古民家で開かれた芋煮会に招かれた頃だったと思う。病気の後遺症で平衡感覚に障害が出たけれども今ではメンバーとの吟行も楽しめるようになった：というようなお話をお聞きした。

そのようなハンデを背負いながらも持ち前のネアかな性格からユーモアが飛びだしその周辺にはいつも笑顔が絶えない。その前向きさが作品にも反映されていて独特の滑稽と癒やしを醸しているのである。

野良猫の春の夢みるボンネット

亀の首遠見するごと梅雨晴間

吟行にでかけないと俳句が詠めないという人が多けれど決してそうではない。ごく平凡な日常生活の中でも明るくおおらかに構えて心を遊ばせることができればいくらでも俳句は存在する。彼女の秀逸な厨俳句がそれを教えてくれる。

食べごろと湯豆腐躍りはじめけり

糠床にぎゆつと押し込む秋茄子

人生における重荷：それは本物の人の優しさを示すために神様がその人に託し定められたのだと私は考える。押しつけの優しさには偽善が見え隠れするが、自分自身の体験を通して人の傷みを共有してあげられることこそが真の愛ではないだろうか。

重荷負ふ友の笑顔や石路の花

何でもないような一句の中にも作者の深い思いが込められていることを汲みとってほしいのである。能勢グループには俳句を通して育まれたかけがえのない信頼がある。互いに切磋琢磨してそれぞれの第二句集を編む日が来るまで頑張っていたいただきたい。よう子さんの句集の序を借りて場ちがいなことを書いたことをお許しください。

平成三〇年六月吉日

やまだみのる

每日句会入選句

自販機に礼を言はれてうそ寒し

吟行の余禄の蓬摘みにけり

口中に香りひろがる蓬餅

山寺の藁に泳ぐ鯉のぼり

茎立ちのほうれん草に嘴の傷

古書肆街軒を連ねて春燈

雛の間行儀良き子となりにけり

楼門の奥処を埋む梅白し

顔寄せて盆梅の香を確かむる

楼門の扁額仰ぐ梅の寺

矢のごとく馳せるは魚影水温む

朝市のおばさんいつも頬かむり

ゆくりなき雪晴れを謝し万歩計

大寒波ポタリともせぬ蛇口かな

綻びし丹前なれどお気に入

背ナに嬰負ひてどんどの火に祈る

母の背ナから児の手伸ぶどんどこかな

悪しき夢幾度目覚めぬ虎落笛

雪しまく谷戸へ傾く電車かな

騒めきの去りし神苑寒に入る

窓の日に脹ら雀や美容院

深々と夕帷落つ枯木立

菩提寺の砦のごとき枯木立

コート脱ぎつつおしやべりす診療所

豪邸の松色変へぬ男ぶり

山門の仁王の脛に散もみぢ

紅葉茶屋日矢に錐揉む煙かな

草蝨払ひつつ待つ里のバス

秋 袷形見の裾を繕ひぬ

はち切れんばかり袋の今年米

甘柿かはた渋柿か野路愉し

おちこちに糲焼く煙道の駅

稲を刈る背の藁屑で鎌を砥ぎ

道祖神へと畦たどる曼珠沙華

藁葺き家沈む棚田の彼岸花

里のカフェエ芒隠れに案内板

空 真 澄 機 影 一 点 秋 高 し

山 巖 の 深 き よ り 霧 た ち の ぼ る

か な か な や 摩 耶 天 上 寺 下 山 道

ひたすらに草食む羊秋高し

天幕の裂けたるごとく雷鳴す

帰省子の干しもの竿のカラフルに

村祭屋台は婦人部総出てふ

観覧車持ち上げてをる雲の峰

青葉木菟巢立ちしあとの大櫓

竹筒に錢いれて買ふまくわ瓜

隠沼に葉洩れ日躍る涼しさよ

舞殿を借りて句会や風涼し

遠ざかる電車に灼けし鐵路かな

胡瓜採るくの字への字も隔て無く

寝ねがての枕に激し虫時雨

イケメンの車夫なれど汗滂沱なる

松浜に憩へば処暑の風通ふ

湯上がりりの宿下駄鳴らし庭涼し

電車みな片側に座す大西日

惚けたるゴーヤさながらカメレオン

本堂へ磴の片陰ひろひつつ

嘴の疵のこる完熟トマトかな

駈けまはる吾子を見守る日傘かな

朗々と吟ずテノール声涼し

はまなすや沖に巨船と漁り舟

麦秋の家並みはなべて能登瓦

テラスへと通ふ疎水の風涼し

楠大樹緑陰なせる宮門跡

薄暑かな出だし揃はぬ吹奏楽

序破急の潮騒のごと青嵐

かはらけの放物線や谷若葉

わき見して連れとはぐれし街薄暑

叩かれて香りを放つ芽山椒

たんぽぽの黄なるなぞへに野良着干す

丁目石辿る道ゆき草若葉

総玻璃のカフェテラス打つ花吹雪

西行に見せたし花の五月山

大桜天蓋なせる殉職碑

櫛の齒の路地に迷ひぬ春時雨

をしげなく黒髪切つて卒業す

デッサンのモデル蛙の目借時

手庇しにミモザ見上げる空ま青

春潮に溺るるときかくれ礁

蜺汁飲んで晩酌了とせん

水うらら幼の投げし石礫

ありがたや
畳廊下の春火鉢

探梅といふは
口実おしやべり行

野良猫の春の夢
みるボンネット

罫線となる畝筋の雪間かな

伐られたる台場くぬぎに新芽ふく

春泥の轍ぐちやぐちや炭焼場

細枝に数珠なす春の雨雫

食べごろと湯豆腐躍りはじめけり

礎はいま万華のごとく紅葉敷く

点滴の犬を見守る夜長かな

入船の水脈煌めける秋の晴

接岸のフェリーにしぶく秋の潮

白砂掃く禰宜の箒の爽やかに

聞き耳をたてて台風過ぐを待つ

短冊をはみ出す文字や星祭

湧水の疎水たばしる里の春

おちこちに野焼きの煙谷戸動く

豆腐屋のラツパの鳴りて路地日永

シースルーエレベーターに風花す

青き踏むこともリハビリ通院す

掃除機のかたと音すは年の豆

出囃子の三味の音もまた早春譜

春一番指名手配のポスターに

鄙とても落人の裔歌がるた

緞帳の色も華やぐ初芝居

弓始女師範も振袖に

淑気満つ千手を翳す大櫂

大晦日子らにも煮しめお裾分け

雪を掻く使ひ込まれし竹箒

長靴に泥付けしまま大根売る

冬帽子おしやれに被る好々爺

着ぶくれて巻き尾の犬に急かれをり

黄落の並木の道をポストまで

山
峡
の
橋
桁
仰
ぐ
天
高
し

豆
腐
屋
の
ラ
ッ
パ
に
声
や
路
地
の
秋

弥
陀
堂
を
写
し
て
浄
土
池
澄
め
る

糠床にぎゆつと押し込む秋茄子

権禰宜の影忙しげや万灯会

秋風にポストのビラのはづれさう

鄙の庭草ひとつなし日照草

苦瓜のジュース蜂蜜ふんだんに

梅雨出水増しゆく嵩を恐れけり

凌霄のうち被さりし辻ミラー

剥くたびにきしきしと鳴く春キャベツ

水仙の香り愛でつつ活けにけり

柄杓もて割る蹲踞の薄氷

初句会花びら餅に舌鼓

行厨の足を投げ出す散紅葉

手をつなぎ子らスキップす園小春

重荷負ふ友の笑顔や石露の花

ふる里は落人の村ゆず熟るる

ロープウェイ粧ふ山を二夕分けす

降りやまぬ落葉なれども掃きにけり

手術前看護師の笑み温かし

峠道下校の子らに暮早し

猪害を託つ話題や村まつり

祭獅子猛る四囲より囃されて

春疾風ダム湖は尖る波の原

雪嶺にアイゼン立てて日の出待つ

辛口の酒を好みて目刺焼く

春の雪落ち行く谿の奈落かな

パドックの人気の馬の息白し

凍て水槽のぞきめだかを数へけり

機織女御用始の櫛がけ

黙々と交はす筆談風花す

県境のダム湖を駈けて寒波くる

濤白く月の断崖洗ひけり

帆を揚げしマストに絡む秋の風

露草や終着駅の車止め

無機質の機械の音や秋暑し

今日もまた病院通ひ花は葉に

参道の左右は著莪の花浄土

春潮の渦大接近船傾ぐ

花吹雪薨の波に降り積もり

礎登る花の二の丸三の丸

唄ふごと風のコスモス句碑ひとり

秋遍路ドライブマップ頼みかな

長電話切るに切られず虫すだく

里山の風に屯す赤とんぼ

被災地を熱く語りし帰省の子

変身をするべく主婦のサングラス

帰省子の旅装解く間も話しかけ

無農薬てふこのあたり蝗飛ぶ

厨へと笥を走る山清水

実より葉の繁るも良しとゴーヤ棚

朝日さす葉裏返してトマト採る

定例句会入選句

花 棟 謎 の 古 墳 と 標 た つ

大 玻 璃 に 絵 画 の ご と き 庭 若 葉

梅 林 の な ぞ へ の 迷 路 め ぐ り け り

遊子へもふるまひ酒や飾り焚く

火柱の龍舌となる吉書揚

御用聞き今日はとんどの火守役

いつ爆ぜるかと身構へるとんどかな

竹櫓倒れ火襖とんど焼

一末社裏参道に年木積む

な滑りそ仰向き歩く紅葉坂

絨毯のごと木の実敷く森の道

御簾のごと萩の枝垂るる石畳

こぼれ萩沙弥の箒に掃かれけり

彼岸花延命橋の橋袂

雷激し車軸を流す雨となる

少年の牧駈け上がる白い靴

友の腕頼みにのぼる露の磴

乗換のホームの長し駅薄暑

走り根に足なとられそ木下闇

亀の首遠見するごと梅雨晴間

一陣の風四阿へ花吹雪

雨ふふみ伏し目がちなる八重桜

満開の梅林迷路めきにけり

梅ま白ルルドの聖母像もまた

接收を逃れしカリオン復活祭

阪神忌未明の闇に祈りけり

萩に目もくれず護摩焚く行者どち

子規句碑の侍者のごとくに実むらさき

山門を額縁として青嶺見ゆ

本堂の鈴の緒重く梅雨じめり

白蓮の一茎たかく池統ぶる

橋裏にかげろふ水の影涼し

青田風四方より通ふ水難碑

バラ園の朽ちしベンチに推敲す

行々子立ち入り禁止札の辺に

苦吟する句帳へふはと春落葉

中空へ千木の尖りし杜若葉

日を弾く白亜の館ミモザ咲く

囀や園児の列に降り注ぎ

足弱を勞られつつ梅探る

涅槃会や風を袂に若き僧

春光を四方に弾きて九輪塔

寒晴や修道院の門広し

寒風に悲鳴をあげし雨戸かな

白壁を映す林泉櫨もみぢ

池の面に声を落として鴨翔ちぬ

向日葵に負けじと笑顔写真撮る

吟行に誘ひの電話梅雨明くる

あるはずの豆腐を探す冷蔵庫

河骨と顔つきあはす吟行子

バス停によき陰落とす緑樹かな

桜蕊積む蘭亭の飛簷かな

参道の露店を梯子春うらら

うどん屋の湯気に足向く梅見かな

凍て道に立ち往生す老二人

無人市あれば寄り道踏青子

義士の墓訪ひしマスクの一と屯

しぐるるや托鉢僧の閉じ瞼

磐座に双手の願ひ冬帽子

小流れに桜紅葉の色をどる

甌岩割れんばかりに百舌猛る

里山に芋の莖買ふ吟行子

御手洗の柄杓につたふ水涼し

絵手紙は孫たちからの避暑便り

蚊遣焚き昔語り
に更けにけり

葉隠れに光る眼は青葉木菟

工夫らの迷彩服は汗しとど

忘れ物ボール花屑まみれかな

鯉跳ねる水面にふるる柳の芽

女正月とはと問ふ子に教へけり

寒稽古まらず道場の床磨き

参道はさながら紅葉浄土かな

裸木に一葉の残る虚空かな

塚の蟻せはしなげなる秋天下

若葉風厨の窓に通ひけり

花吹雪ベンチの人の背に肩に

老木に深き傷痕花吹雪

窯入れを待つ陶の棚春寒し

陶土練るブーツの女春灯

下萌に翁の句碑や暴れ川

遠巻きに幼が囲むどんど焚き

走り根にな躓きそ紅葉狩

バイオリン背に自転車の落葉道

昇神の神事の声に天高し

神樂終へ巫女母親に戻りけり

湯玉散る巫女の青笹秋気澄む

水音に和して揺れゐる秋の草

毬栗の転がり出でし車道かな

吟行句会入選句

春がすみ淡路の島の浮かびけり

子午線の朧の海へ消えにけり

振りあげし鎌力なし枯蠘螂

潜戸の一步ためらふ落椿

菜種梅雨剥落烈し築地塀

色鳥来墓標の義士の寧かれと

草じらみつけて里山吟行す

農小屋を隠すばかりに秋桜

唐破風に菊の御紋の夏館

緑立つ唐門仰ぎつつ潜る

さやかなる離宮の庭の春惜しむ

鶴亀の島へかかりし橋涼し

踊るごとと幹ねぢれたる大桜

ジェット機の爆音過ぎる枯木立

温かや母の形見の服なれば

菊手入れ宝のごとく愛ほしみ

満開の藤の香に酔ひ人に酔ひ

倒木に宿りて芽ぐむ若木かな

池の面の青天井に懸り藤

手作りの花見弁当お裾分け

廃屋の破れ網戸に秋日濃し

一枝に触るればほろと萩の屑

遊び場は城址の礎石雀の子

官兵衛の幽閉地ここ蟻の道

十葉の小さき群落女郎塚

雨に濡れ風神雷神春寒し

水亭の玻璃戸に透ける春灯

狂ほしき池の水輪や春の雨

立ちのぼる谷戸の煙に秋惜しむ

恋螢もつれ合ひつつ杉の秀へ

橋の上に影寄り添へる螢人

吟行子茅花ながしに足軽し

下閤に水の香立つや水路閣

炭焼を誇りとしたる生計かな

斎垣の区切る聖域冴えにけり

川風に吹きあがりたる糸とんぼ

箕面道一目千本若楓

冬の蝶棚田一枚とびきれず

トンネルの多し能勢路の紅葉山

あとがき

お薦めにあまえて思いがけず素敵な句集が出来上がりました。ほんとうに嬉しいです。むかし母が俳句をしていて吟行にでかけるたびに楽しそうにお弁当を作っていたのを覚えています。お友達から誘われて躊躇なく地元の初谷句会に入会できたのはその姿を見ていたからかもしれません。

俳句を初めた頃は、まだ遠くへ出かけることは叶いませんでしたが、今では体調も回復し句仲間の助けをいただきながら吟行に句会にと充実した日々を楽しんでいます。ウェブサイト『ゴスペル俳句』との不思議なご縁に感謝しつつ、これからもライフワークとして励みたいと思っています。

身にあまる序文を頂き、句集についてご指導を賜ったやまだみのるさん、句集の編纂にご協力いただいた句友の皆さまに心よりお礼申し上げます。

平成三〇年六月吉日

西岡 よう子

『祭獅子』 西岡よう子句集

平成三〇年七月一五日 印刷

平成三〇年七月一五日 発行